

佐藤春夫と一九一〇年代（五）

——ニーチェ・鷗外・大石誠之助との関わりをめぐって——

石 崎 等

まなびやのふみうりはらひ

国禁のふみよみふけり

さけたうべうたあげつらひ

なみだするはひとのしらぬま（『わがはたち』）

一六、佐藤春夫一家をモデルにした『自転車』

『定本佐藤春夫全集』（臨川書店）の第三六卷（二〇〇一・六）にはそれまで発見された書簡のすべてが収められている。沖野岩三郎の名前が最初に登場するのは、一九一八（大正七）年八月二日付、父豊太郎宛の一七番書簡の中である。そこには「○昨日、沖野岩三郎氏が来しました。同氏も九月には書物を出すさうです。私にも序文を書けといふやうなことでした。」とある。この段階で二人の交渉はかなり綿密であることが見て取れる。沖野の『煉瓦の雨』という同名の表題の作品集は同年一〇月一日に福永書店から出版された。佐藤はそこに跋文「手紙を以て跋に代へます」を寄せている。ただ父親宛の書簡を見ると、モデル小説の描写方

法に対する辛辣な批判が書かれていることが分かる。

私にも序文を書けといふやうなことでした。同氏の自転車は、作品としても悪作です。しかし作者がモデルとして実在の人を描く場合に、描かれた人はどんなに書かれても不快なものに相違ありません。（中略）私は沖野氏が実在の人物を書くといふことに異存はありませんが、沖野氏が沖野氏のあまり円熟したとは許〔評〕しがたい人生観の見界から、人間を書き出して居ることを面白くないと思ひます。沖野氏のなかに出てくる人間は、ほんとうの人間のやうな活き活きした点が一つもありません。その人間の真実と、靈活とが書いて居れば、たとひどんな不快な事件を書き出して居てもいいのだと私は思ひますが。

（『定本佐藤春夫全集』第三六卷二二頁、傍点引用者）

批判されているのは『煉瓦の雨』ではなくて、傍点を付したように『自転車』という作品である。文末には脱稿日らしい「一九一八年四月二十五日夜」の日付けが記されている。

熊野の医者・伊藤鳳一郎には三人の子どもがいた。姉の宮子は須藤に嫁ぎ京都にいた（二人の間には寛一と俊子という子どもがいた）。鳳一郎の長男である中学生の一夫は数学が苦手で落第点を貰った。医者になる期待を抱いていた鳳一郎は怒りに駆られ、買い与えたばかりの自転車を破壊してしまった。一夫は、町の劇場で開かれた東京から来た文学者の講演会で飛び入りの演説をしたために物議をかもし、停学処分をくらってしまい、父親から翻訳の資本金を貰って上京し、慶応義塾に入り文学活動を始める。

一夫は「彼女と狗」と題した絵画を応募し、父親に入選したことを知らせる。実物を買い上げた鳳一郎は送られてきた絵に満足して診察室に掲げた。あるとき、一夫は結婚した（内縁関係だったが、そう描かれている）路子をとともに帰省し、離婚した宮子も二人の子供を連れて帰宅する。鳳一郎は子どもたちの成長ぶりを確認し、孫・寛一の将来に期待して落涙する……。

佐藤春夫とその一家をモデルにした小説であることは一目瞭然である。父と子の対立劇の裏にある親愛の情もなかなかうまく描かれている。一夫はときどき悪戯をして父を挑発し戸惑わせる。

これは父を含むあらゆる権威に不信を突きつけようとする佐藤の人間性を象徴している。軽妙なユーモアが発揮されているのも捨てがたい。しかしモデルとなった佐藤の立場からしたら、どんなにうまく書かれていても、自己とその家族像は（不快なもの）であり（悪作）と断定するしかなかった。

沖野はなぜ佐藤家や佐藤の履歴についてこれほど詳しく知っていたのであろうか。佐藤自身や大石誠之助などから大筋を聞きだしていたとしか考えられない。一九一八（大正七）年八月一日、

書評を懇望しても佐藤がなかなか書いてくれないので、沖野は佐藤の許を訪問した。そのときゲラで読んでいた佐藤は、オブラートに包んだような批評を口にしたのではないかと思われる。しかし跋文では厳しい批判をぶつけた。佐藤の疑問と不快感は、『自転車』が作者の心を揺さぶるような個人的な体験から引き出されてきたものではなく、聞き取りや伝聞によって表層的に私生活が覗き見られていることにあった。西村伊作が『煉瓦の雨』でモデルにされ、自分の一統について書かれたことに不快を懐かずに「貴方が芸術に真実を愛せられたることをも仕合せだ」と感じ、〈我々の間に痛い程の切実な交りのあるのを真によるこびました〉（『痛いほど切実な』）と諸手を挙げて謝辞を呈したのとは雲泥の差があった。

一七、一九一五年、再び新宮というトポスへ

『自転車』のモデル問題はさておき、佐藤と沖野は同郷のよしみで交際を深めつつあったことは明らかだ。二人は同郷人として小説執筆でのライバル関係にあったといえるだろう。佐藤の父親宛書簡にはそれが如実に示されている。すでに触れたように、一九一五（大正四）年三月一三日から一五日まで、与謝野晶子は大石誠之助の妻を慰めるために熊野旅行をこころみる。そのとき佐藤は同棲していた川路歌子を同道し、晶子と一緒に新宮への船旅をした。晶子の『旅にて』一二首（『反響』一九一五・五）はその折に詠まれたものである。帰省した佐藤は家族に川路歌子を紹介するとともに晶子の旅の案内人を務めた。歌子を新宮の実

家に連れて行つたことは『自転車』の中にもチラツと出てくる。

悲しくてありがふ力持たぬごと夜の海に来て船に身を置く
小さな夜の汽船に居る思ひ忘れむ日なきころこそすれ
海の上夜明に近しつつましく毛布をかづくS夫人かな

甲板にもの音すれわがおもひいにしへの日にうち通ふかな
勝浦の青きみなどに船入ると知る刹那にもわれは悲しき（与
謝野晶子『旅にて』）

『旅にて』一二首のうちの五首である。三首目の（S夫人）は佐藤夫人の川路歌子を指すのだろう。それにしても四首に表出している晶子の心は（悲しみ）にうちふるえ、叙情のトーンは（思ひ忘れむ日なきころ）と（いにしへの日）の記憶へと収斂している。それは静かな慟哭といつてよいだろう。これから会う大石の未亡人ゑいとその遺児に馳せる思いが滲み出ているといえようか。

『反響』は生田長江と森田草平によつて創刊された雑誌だが、同じ号には沖野の『私までが狂ひさうだ』（その二は同年九月号に掲載）と奥栄一の『太平洋に面して』が発表されている。晶子の旅と勝浦入港の歌、奥と沖野の小説——『反響』誌上に現れた紀州半島突端の風はほのかなヒューマニティーの光を帯び、（冬の時代）の重圧を押しつけるかのように優しく吹いていた。文学者たちは（新宮）というトポスに再び身を置くことによつて何が胎動しつづつある兆候をかぎとっているかのである。そしてそれら三つの文学表現には佐藤が何らかのかたちで関わっていた

のである。いわば佐藤は新宮文化圏と東京を結びつけるキーパーソンであった。

「大逆事件」関係のいわゆる「紀州組」では、一九一四（大正三）年六月二四日、無期懲役刑を受けた高木顕明が収監中の秋田監獄で自決している。高木は新宮の浄泉寺の住職をしていたが、事件後に真宗大谷派から差免という処分を受けて除名されたことはすでに触れた。晶子をひそかに敬愛していたことでも知られている。

『太平洋に面して』は死んだ高木を回想した短篇であり、「大逆事件」を扱った小説としては比較的早い部類に属している。「大逆事件」を巧みにカモフラージュして作中で裁判の冤罪問題を背景にするなど、その社会意識には興味深いものがある。しかし事件後の内面的な苦悩の掘り下げがない。南国の海岸風景を背景に、二人の男によつて（○○の住職）が監獄で発狂して、死んだのを新聞報道で知つたこと、そしてその住職は若い頃、監獄の教誨師をつとめていて二人の死刑囚とかかわりを持ち、冤罪の老人死刑囚を救おうとするがそれがかなわず、処刑されてしまい、その後真犯人がいたことによつて（和尚の信仰に鋭い釘）が打ち込まれ、socialistの道に入ったといういきさつが語られている。さらにはお経商売を飯にすることを嫌つた住職が按摩によつて金を稼いだことなど、高木を髣髴させるエピソードによつて補強されている。

奥栄一は新宮中学時代に同級生の佐藤春夫とともに詩や短歌を発表し、上京後は堺利彦の売文社で翻訳の仕事をしたが小説や評論の分野に活路を見出そうとしていた。『反響』には叛逆と自嘲にみちた短歌を寄稿している。生田春月は「啄木も奥栄一も悲

しけれ茂吉の知らぬ悩みだきて」と詠んだ。一九一八年七月、奥は大石七分の『民衆の芸術』発刊に加わり、同誌一月号（第一巻第五号）には『煉瓦の雨』の批評を書いた。³⁹

一方、『私までが狂ひさうだ』は沖野が牧師をしていた七年間に接した男女八人の精神の病歴を題材としている。今日からみて〈狂〉とは必ずしもいえない病例もあるが、警官の不当逮捕と理不尽な取調べ、早発性痴呆症、日露戦争によるPTSD、父権による人権蹂躪、明らかに〈狂〉の徴候を示していたクリスチャンの教師が治癒して校長となり〈教育勅語〉の奉読のたびに泣く話、沖野の教会の美しい少女の聖歌隊を世話して欲しいという某大学の高名な博士の兄、田舎の中学からイギリスのセブンスデー・アドベントイスト・カレッジに入学している青年にまつわる不思議な因縁譚など、およそ常識では理解できない迫害妄想や追跡症の事例や奇異な話が披瀝される。さながら小説の材料袋の観がある。明らかに自然寛解が見られる者もいるが、多くはキリスト教信者に関する話である。ある意味では、こうした病例は閉塞的時代における精神のさしみを象徴していた。

その中で唯一女性の〈狂〉が描かれているのが（四）白菊女史の曆の切断⁴⁰である。内容は〈垢抜けのした年若い美人と頗る風采の揚らない牧師とが互に信用づくで一身上の秘密を語り且つ聞かうと云ふ〉話であり、一種人生相談の形式をとっている。漱石山房を訪れて漱石に人生相談をした吉永秀を髣髴させる。

Sという東京の学校を卒業した女は友人が滞在している箱根塔ノ沢を訪ねる。そこで某男爵家の御曹司と知り合い（将来の交際）を約束する。東京に戻ると、御曹司の誕生日の祝いに招待される。

Sは文部省の役人の家に下宿していたが、帰宅直前に一台の自動車の中の男から御曹司の急病を知らされ、目隠しされて強引に同乗させられる。目を開くと、西洋間のベッドに寝かされていて、自分が拉致されたことに気づく。そして若い男女から男爵の息子と婚約しているかどうかを問い質される。二人は主義を同じくするアメリカ帰りの同志であって、男爵は〈不倶戴天の仇〉だから、婚約しているなら命を貰うと脅迫される。思想的な交際だったと弁明すると、誤解は氷解し再び下宿先に戻される。しかしSはそのとき体験した時間・空間の変容と空白を埋めることができずに苦しむ。帰郷したSには脅迫の手紙がたびたび届く。やがて身近な消印のある手紙が舞い込み、二人のうちどちらかがこの土地に来ていると思うが、知っているなら教えてほしいと頼む。重要なのはその次である。

『あの時私をビストルで嚇したのは此の所のN氏がOさんかどうかであらうと思ふのです。若し御二人共さうで無いとすれば、多分Nさんの所へ其男か女かを隠してあるに相違ないと思ひます。』

……（中略）……其後米国帰りのO（Nの弟）の所へ白菊女史といふ名で、何月何日に△△松原に襟に白菊を挿した女が居るから是非其所まで来てくれろといふ意味の手紙が来たと聞いたが、Oは怖れてよう行かなかつたさうな。

〈N氏〉は西村伊作、〈Oさん〉は明らかに大石真子か大石七分を指している。この後、後日譚としてSの不幸両面の結婚生

活が語られているが本筋とは関係ない。沖野は（一生の歴を切斷されたといふ事）は不幸などではなく、むしろ（現実のまゝで理想の国を見て来た女）の精神的病態だと解釈をする。つまり男爵の御曹司との婚約は幻想であり、男女二人による脅迫はその夢を閉ざす（狂）として発動した自制心Ⅱ情念だったということである。遂げられない願望によつて妄想がふくらみ、自ら悲劇を創作して演じていたということである。

ここには「大逆事件」の影はない。しかも病者に当てられた光は弱い。沖野は直感的に（狂）を見抜いたけれども、（性格—環境—体験の複合から反応性における妄想発展のかたち）^⑩という病者の精神のかたちを掘り下げることができなかった。

『或る女の幻想』は、佐藤自らが述べているように沖野から聞いた話を基にしてふくらませたものだが、その典拠が『私までが狂ひさうだ』の一挿話だったことは確實である。しかし沖野は（佐藤春夫君を訪問していろ／＼話しの末にこれを書いて見やうかと言つたのが筆を執る動機になつた）（序言）と述べているように、（狂）の病例をいち早く活字化してしまつた。そうした事情があつたにせよ、佐藤にとつて、沖野との間でSと（N氏かOさん）の關係が話題となり、新宮に「大逆事件」が及ぼした情報を取りかわされ、三年後の『或る女の幻想』のプレテクストとして「白菊女史の歴の切斷」が存在したことの意義は無視することはできない。

『或る女の幻想』と『煉瓦の雨』が発表された一九一八（大正七）年前後、刑死した大石誠之助と成石平四郎と獄中で自死した高木顕明を除き、残る『紀州組』の成石勘三郎・崎久保誓一・峯

尾節堂の三人は服役中だった。しかし『宿命』を含めて、この時期「大逆事件」の犠牲者についての文学化に一体何が働いたのだろうか。一種の謎としか考えられない。『煉瓦の雨』が出版される前、少なくとも大正六年春頃までに沖野は長篇『宿命』を完成させていた。

『宿命』は、沖野が大阪朝日新聞社屋落成記念の長篇小説懸賞募集に応募した小説である。締め切りは一九一七（大正六）年五月。二一篇の中から二等に当選し、沖野は賞金七〇〇円を獲得した。選者は内田魯庵・幸田露伴・島崎藤村。魯庵が九九点をつけたのは有名な話である。噂では、一等だったが、大石誠之助を題材にしたものであったため二等に格下げされたといわれている。大阪朝日新聞社の方針で、東京朝日新聞社を通じて内務省警保局の内検閲を受け、長谷川如是閑などの親切な要望を受けて改作された。ここには「大逆事件」後六年を経過したジャーナリズムにおける良心のかたちが示されている。

こうして改作された『宿命』は、一九一八年九月六日から同年一月二二日まで、全七八回が『大阪朝日新聞』に掲載された。佐藤が『宿命』執筆と改稿問題をめぐって、沖野から相談を受けたなかつたとするのは難しい。『或る女の幻想』の発表は、『宿命』の応募と改稿を経た『大朝』発表時期の中間に位置しているからである。小田切秀雄はかつて次のように書いた。

「宿命」は、この大石誠之助を中心とした、沖野自身をもふくむ明治四〇年代の新宮の思想的な青年グループをとりあげた長篇小説で、大逆事件を紀州南端のこの町から描きだそうとし

たものである。

……(中略)……

……大石の社会主義がきわめて理想主義的な独特なものであったことはこの「宿命」につぶさに描かれていて、(……)

与謝野寛や佐藤春夫の悼詩とはまたちがった、詳細な小説的方法で描くことを通しての、大石への沖野の愛着と痛憤とが生きて示されている。(傍点引用者)

『煉瓦の雨』の大星像も同様に〈大石への沖野の愛着と痛憤〉だったといえるだろう。

長い迂回を経て『或る女の幻想』に戻ることにする。この小説を論じる際に見落とせない点は、すでに「一二、『或る女の幻想』の位置」で指摘した簡条書きの⑤⑥⑦⑩をどのように考えるかにある。佐藤の回想のポイントは、『或る女の幻想』は方法的に失敗作だったけれども、その中にも〈作者は棲息して〉いること、沖野岩三郎から聞いていた〈大逆事件余話〉を題材としたものだが、小細工など弄さないで〈実話としてルポルタージュ風の風俗小説〉にすべきであったというところにある。また佐藤が「俺もひとつ」という文学的な野心を起さなかったとはいえない点も気になる。

こうして、佐藤が「白菊女史の暦の切断」をどのように換骨奪胎し、想像力を駆使して独自の世界を切り拓きつつ、しかもそれが〈小細工を弄した奇道〉に踏み込み〈駄作凡作〉に墮してしまっただか、そしてそこに棲息していると主張する〈作者佐藤〉とはどのようなものであったか、という問いの構造が新たな論点と

して浮上してくる。¹²⁾

一七、〈紀州の刻印〉——中上健次の言説——

大正デモクラシーの昂揚にも関わらず、一九一八(大正七)年前後の文壇において、『或る女の幻想』がもつ社会性は注目されなかった。読者の目はもっぱら『田園の憂鬱』に注がれた。佐藤の社会への関心は、後に書かれる『美しい町——画家E氏が私に語った話』(『改造』一九一九・八、九、一二)によって測られた。佐藤春夫と同郷人の作家中上健次は次のように書いている。

紀州、紀州人を感じている歪みを正直に伝える事に心もとないが、たとえば大逆事件の大石誠之助を愚者と言ひ、「われの故郷は紀州新宮／渠の郷里もわれの町」(「愚者の死」)と歌う佐藤春夫である。

『殉情詩集』の天才詩人として出発し、『田園の憂鬱』等の美しすぎる傑作を書いたが、何やら小説家ではなく天才詩人のまま不帰の人になった気がする。

私の畏敬する谷崎潤一郎より資質や才能が劣っていたわけではない。

春夫をみると、絢爛と咲くべきだった小説の花が、何ものかに奪われた気がする。花が漢詩漢文脈の方に消えた気がするのである。(『紀州 木の国・根の国物語』「序章」)

中上健次が佐藤春夫のアイロニカルで寓意的表現である〈愚

者」に注意を凝らしていない点は気になるが、それはしばらく措く。ここには、佐藤は〈紀州、紀州人に感じている歪み〉を体現している〈天才詩人〉だが、本来あった天分が何物かによつて歪められ、十分發揮できなかった不幸な作家像が提示されている。中上は、〈天才詩人〉が優れた小説家というコースに乗り切れなかった人間の悲劇の根源に、二〇歳のときに遭遇した「大逆事件」からの〈転向〉をみようするのだ。その〈転向〉の実体は『愚者の死』を引用して論じた別の文章で次のように敷衍される。

春夫が、自覚の有無にかかわらず、物語に敏感であるのは、春夫の故郷が、愚者と同じ紀州新宮であつた事にまず指を折る。春夫の故郷が紀州新宮であつたがゆえに、文学者としての最初の出発点で、転向せざるを得なくなるのである。転向、と私は言つたが、これも、世間で言うところのマルクス主義という思想を棄てるというものとは違う。紀州新宮出身をひとまず身の内側にかくす事である。文学者のまだ経験が蓄積されていない年齢に、出郷して来たばかりの郷里紀州新宮で、天皇暗殺謀議があり何人かが逮捕されたのである。春夫は、神武東征以来の紀州を知つていたはずだった。大津皇子以来流れる、敗れおとしめられた紀州というもうひとつの共同幻想を知つていたはずである。その物語といまひとつ、現存する国家という物語を前にして、春夫は、紀州という物語を、それ以降、黙したはずである。(中略)紀州について口をひらけば、あの物語とこの物語が、身を減ぼさず。転向とは、この発見の事である。(物語の系譜 佐藤春夫)、『国文学』一九七九・二、のち『風景の向

こうへ』(一九八三・七、冬樹社)所収、傍点引用者)

紀州の歴史的古層にさかのぼつた中上の指摘はおそらく大筋において正しいといえるだろう。異質なふたつの共同幻想である〈あの物語とこの物語〉をまともに引き受けて文学者となることの危険性をヒリヒリと感受したがゆえに、〈紀州新宮出身をひとまず身の内側にかくす事〉が必要であつた。だが周囲の状況は〈新宮出身〉であるがゆえにいつまでも身を隠すことを許さない。その危険な誘惑をいつ破るか。佐藤にとつて、小説を書くことは〈紀州の刻印〉といかに格闘し、作品化するかということであつた。つまり〈大石への愛着と痛憤〉(小田切秀雄)をどのようなかたちで表現するかと言ひ換えてもよいし、旧知の人間の死を経て生き延びた者によつて語られるべき物語の構造はどうあるべきかという問いでもあつた。自然主義を否定する佐藤にとつて、小説は『愚者の死』のときのように韜晦されたアイロニーと寓意的表現に収まるようなテーマではなかつた。『或る女の幻想』における野心と失敗はそこにあつた。

一九一七(大正六)年といえば、夏目漱石が死んで一年、佐藤が大きな影響を受けた森鷗外が歿する五年前のことである。この年は、芥川龍之介の『羅生門』が刊行され、佐藤も発起人の一人になつて出版記念会が催された。また志賀直哉、武者小路実篤、里見弴、有島武郎ら白樺派の活躍が目覚しく、佐藤も江口渙らと始めた雑誌『星座』一月号に『西班牙犬の家』、『黒潮』六月号に『病める薔薇』をそれぞれ発表して一部の文壇人の注目を浴び、広津和郎らとともに所謂新人の〈十人十色〉の時代を現出しつつ

あった。

佐藤春夫は、のち室生犀星が実践したように、詩から小説への転換をスムーズに図ろうとしていた。しかも他の小説家との違いを鮮明にする「大逆事件」の影、つまり中上健次のいわゆる敗者を貶める伝説の強い（紀州の刻印）を背負っていた。自らの額にある（紀州の刻印）を恐る恐る鏡に映しながら試みた小説が、『西班牙犬の家』や『病める薔薇』と同年に発表された五つのパラグラフからなる『或る女の幻想』ではなかったか。未踏の重すぎるテーマに挑戦したために必ずしも成功作とはいえなかった。しかしそれは新宮に生を受けた『愚者の死』の詩人にしか書けない小説だった。

一八、〈S・O一族の二青年〉

『或る女の幻想』（一九一七・二二『中外』）は、〈S・Oと呼ばれた人〉＝大石誠之助に対する新宮人の偏見が、一女性の病理（無意識なメラニコリア）によって増幅され、次第に彼女自身を不幸へと追いやっていくことが明らかにされる小説である。作品構造は、主人公の告白を「語り手」＝〈编者〉が記録し、それに若干の解釈を施すというかたちになっている。

主人公は「彼の女」とされているだけで具体的な名前がない。

「彼の女」は新宮の貧しい商家の娘で、東京の叔父さんの家に下宿して女学校に通っている。病を得て、その療養のために箱根に滞在しているときに、X伯爵家の御曹司との恋愛関係が生じ、その花嫁になることを夢見て交際を深めつつあった。ある日、「自

ら亜米利加の社会党员を名のる日本人」二人によって誘拐され、結婚の夢は閉ざされる。二人の社会党员が属するグループは、貴族制度を否定するがゆえに、秘密な運動の血祭りとして、X伯爵家の罪悪への報復と社会的な制裁を加えるために、御曹司の結婚相手を誘拐して監禁し、その実現を阻止するための実行犯であった。監禁され密室の悪夢を見た「彼の女」は、自分の身を救うためにX伯爵家の御曹司との関係の経緯を正直に語るのであった。箱根から帰京すると、御曹司はすぐに奇病に罹り、U病院に入院する。「彼の女」は見舞いのためにその病院に通いつめる。看護婦たちは二人をあたかも婚約者同士であるかのように扱う。

たまたま新聞にX伯爵家の園遊会の記事が出る。彼はそれが自分の全快祝いの意味を持ち、また「彼の女」を家族や若い貴婦人たちに紹介するよい機会だと理解し、具体的に上流階級の令嬢たちの名前を口にする。その中に、従妹の「I子爵令嬢E子」があり、「彼の女」は直感的に許婚者ではないかと思ひ、激しい嫉妬に駆られるのであった。「彼の女」は婦人雑誌の口絵で「E子」が美人であることを知っていたからである。「彼の女」が誘拐され軟禁されたのは、ちょうどその夜の病院からの帰りのことであつた。

〈自ら亜米利加の社会党员を名のる日本人〉二人は、X伯爵たちが（陸海軍の御用商人と結託したり、現米の買占めを行はせたり、人民の膏血をしぼるやうな事）を平気で行っている、と、その罪状を曝露し、結婚のための園遊会を妨害することを公言するのであった。「彼の女」は、機転を利かし、婚約者の本命が「E子」であることを打ち明け、X伯爵家の園遊会への出席が不可能

となつた段階で放免される。「彼の女」は結婚の夢が消えてしまつたけれども、それをとくに恨む様子もなく、むしろ自分のライヴァルと目される「E子」への（隠微的な嫉妬）に駆られながらも、自分と同じ体験に遭つているE子に同情を寄せるのであつた（「隠微的」とは聞きなれない言葉だが（無意識的）」という意味だらう。

それまで佐藤自身を始めとして、多くの文学者たちがあからさまに「大逆事件」に言及するのを避け、暗示的に文学の題材としてきたのに対して、この小説では新宮グループに関する事件の内容が次のように具体的に表現されている。

彼の女は、これ等の奇異な事件に遭遇した後に、東京の叔父の下から、故郷の父母へ還された。彼の女の故郷は紀州新宮地方であつた。この地方は、その当時の世界的事件である所謂大逆事件なるものに依つて、大逆者たる数人の社会主義者が一時に刑せられた。或は死刑になり、或は無期懲役になつた。さうして社会主義なる言葉は一種の地方的恐怖であつたのである。それ等社会主義のなかでもS・Oと呼ばれた人がそのなかでの最も重なる人であつた。さうして彼の一族はすべて社会主義者であるかの疑を、地方の人々に抱かせた位である。丁度、彼の女が、こんな状態で帰郷した当時S・Oの一族であるところの二人の富有な青年が、遊民的な亜米利加の生活から故郷へ帰つて居るのであつた。亜米利加から帰朝した社会黨員に東京で逢つて来たところの彼の女の考へは、忽ちにS・O一族の二青年を連想した。さうして考へれば考へるほど、彼の女はこの二青

年が、彼の女が東京で会つた二人の社会黨員にそつくりなのに気がついた。それは無理もない事である。彼の女は初めS・O家の二青年の分身を、彼の女自身で生み出して、彼の女はそのS・O家の二青年の分身と東京で会つて来たのだつたからである。併し、彼の女自身はさうとは知らずに居る。さうして彼の女が東京で逢つた二人の若い社会黨員はS・O家の二青年の分身ではなく、二青年その人だと考へ初め、考え込んだ。（傍点引用者）

（S・O）は明らかに大石誠之助を指している。誘拐という犯罪の謎解きと（分身）の関係は佐藤が一時関心を抱いて試みた探偵小説的なテーマの先駆といえるだろう。では（S・O一族の二青年）とは誰を指しているのだろうか。

すでに言及したことが、改めて（S・Oと呼ばれた人）の一族について整理してみよう。誠之助の長兄大石余平と妻ふゆの間には、伊作（明治一七年生）・真子（明治二〇年生）・七分（明治二三年生）の三兄弟がいた。余平・ふゆはともにクリスチャンであり、一八九一（明治二四）年一〇月二十八日、滞在先の名古屋で濃尾大地震に遭い、名古屋英和学校のチャペルから逃げる際に落下してきた煉瓦の直撃を受けて死去し、連れられていた長男の伊作は奇跡的に難を逃れることができた。牧師O〇沖野岩三郎が後にこの悲劇を発端とする一族の歴史を『煉瓦の雨』という小説にしたのである。戸主を失つた伊作の母・ふゆの実家である西村家は紀州の山林王として有名であつたが、跡継ぎとして孫の伊作を養子に迎え、西村家の莫大な遺産は伊作が受け継ぐことになる。

以来、伊作は叔父の誠之助とは兄弟のように付き合うことになる。こうした伝記的な事実は、先述した黒川創の『きれいな風貌 西村伊作伝』によって見事に再現されている。

伊作は日露戦争が勃発すると、果敢に徴兵忌避のためにシンガポールに逃れ、戦争終結後に帰国している。弟の大石真子は一九〇六（明治三九）年二月、ロサンゼルスハイスクールに留学し、翌年の一月には、同志社英学校普通科を終えた大石七分も兄を追ってボストンのハイスクールに留学する。二人の弟をアメリカに送り出した後、西村伊作は一九〇七（明治四〇）年に結婚して翌年には一児の父となるが、真子の病気の知らせを理由にヨーロッパ経由で単身アメリカに渡り、二人の兄弟との再会を果たし、一九〇九（明治四二）年夏、五ヶ月ぶりに帰国する。大石誠之助が「大逆事件」に連座して死刑の判決を受けると、伊作と真子は獄中の叔父を見舞うために護身用のピストルを携行して、当時としては流行最先端のモーター・サイクルに乗って上京するが、誠之助との面会はおろか、官憲に捕えられ拘留二九日の処分を受けてしまう。権力の影は社会主義者や事件関係者の動きに色濃く及び寄っていたのである。二人が新宮に帰ったのは誠之助が刑死する約二週間前の一九一一年一月八日のことであった。末弟七分の帰国は、事件の余波を避けてか、それからはるか三年後の一九一四（大正三）年夏ごろであった。

作者が「彼の女」の妄想的な悲劇を仕組んでいる時間が不明であるとしても、小説が発表された一九一七（大正六）年の時点とこうした事実を勘案すると、〈S・O一族の二青年〉とは大石真子と大石七分兄弟をモデルにしていることは確実であろう。この

とき、伊作は三三歳、真子は三〇歳、七分は二七歳であった。渡欧中に社会主義思想の洗礼を受けていた七分は、帰国して数年後の大正五年頃、本郷菊富士ホテルに下宿していて大杉栄らの付き合いがあった。そうだとすると、二人の富有な青年が、遊民的な亜米利加の生活から故郷へ帰つて居る」という構想にはあるリアリティーがあったといえるのである。

「彼の女」にモデルがあったことは「うぬぼれかがみ」の中で語られている（箇条書きの⑩）。メランコリアやヒポコンデリアという気質は、作者佐藤と同定しうる共通した病理といえるだろう。『海辺の望楼にて』という短篇の主人公・村瀬穆彦は五六年前から（メランコリア）に罹った青年として造型されている。そうしたことも想起される。

「彼の女」はメランコリアらしい軽い精神的な病いから、郷里の名門とされている〈S・O一族の二青年〉が恐ろしい〈社会党員〉であるという幻想を抱き——それは〈彼の一族はすべて社会主義者であるかの疑を、地方の人々に抱かせた〉という一文で明らかだ——、自分が誘拐されたことによって、伯爵家の御曹司との結婚の夢を閉ざした張本人が、郷里新宮を震撼させた〈S・O一族の二青年〉の〈分身〉などではなくて誘拐犯そのものであったという結論に達する。いや、そこまでは及ばないで（考へ初め、考え込んだ）ままであったのかもしれない。いずれにせよ、ここには自己の責任を別のものに転化する病理がうかがわれる。「彼の女」は、〈奇怪な真白な部屋〉に連れ込まれ、それまでの意識の持続が切断された〈奇怪な時間〉の体験を次のように告白する。

……あの晩、ただ一度あの不思議な自動車に乗せられて以来、あの奇怪な真白な部屋に解剖台の上の死屍のやうに横はつて居る私自身を見出したその間のみは、私には全然何の意識もなかつたので△います。丁度、今まで続いて来た生活が、その一夜のうちに忽然見失はれ、さてその次の生活とどんな風に連続させてよいものやら、丁度もつれて切れた糸の緒と緒とがわからないやうに、なつて仕舞つたので△います。

「彼の女」は時間だけでなく場所についても不可思議な喪失感に捉われている。日常性における時空の溶解と意識の喪失。そのきっかけが、(S・O一族の二青年)に酷似した(自ら亜米利加の社会党员を名のる日本人)二人が乗り回している(不思議な自動車)に拉致されたのは興味深い。佐藤春夫は周囲の大石誠之助の甥たちから刺激を受け、こうした発想を小説に取り込んだ感覚のモダニストとしても先駆者であった。自動車という小道具は、大石の甥である大石七分をモデルにフランスを舞台にしたモダン小説『F・O・U』(一九二六・一『中央公論』)へ連鎖している。⁴⁵

ここにはフロイト移入以前における佐藤の精神病理学の知見もうかがわれる。作者がタイトルにした〈幻想〉とは、そうした世界に紛れ込んでしまった「彼の女」の時間・空間の溶解と意識や記憶の喪失との観念連想を指している。

「彼の女」が牧師O(沖野岩三郎がモデル)に救いを求めて語った事件(とその作品化)の顛末は一笑に付さるべきことなの

だが、階級差を超えて結婚を夢見る女性にとつては一面の真実であったといえる。そうした話題はのち菊池寛らの通俗小説の格好のテーマとなっていく。

しかし、別の観点からみるならば、「彼の女」はX伯爵家の罪悪を容認し(あるいは認めずに)ただひたすら情熱的に自分の願望を夢見る平民の娘にはかならない。作者佐藤はそのことを肯定しているのか、それとも否定しているのか。

伯爵家の少年紳士と庶民出でクリスチャンの女学生の恋物語。

〈伯爵家〉〈子爵令嬢〉〈園遊会〉という新宮という地方都市からは予想もできない空疎な上流階級のこの通俗的なドラマは、鋭い〈傾向詩〉を発表してきた詩人の感性とは相容れないものである。通俗小説の世界では、菊池寛や中村武羅夫の小説のように、デモクラシーの潮流を反映して(迎合して)、階級差を越えたカッブルの誕生を文学的なテーマとして肯定しつつあったわけだが、佐藤春夫の場合、そうした文学的結晶度を得ることなどはなかった。

このテクストは、一方で〈大逆事件〉〈社会主義〉〈新宮〉〈地方的恐怖〉〈幻想〉〈分身〉という一連のシェーマによって貫かれている。「彼の女」が新宮でメランコリアの人・一風変わった人として遇されていることは、「孝女白菊女史」と署名され、逢いたいという手紙を貰った(S・O一族の二青年)の一人がまったく取り合わなかったことから分かる。「孝女白菊女史」の手紙が届くというプロットは沖野の話そのまま踏襲している。しかし青年の反応はやや違っている。

〈亜米利加から帰朝した社会党员〉たちによる秘密な運動の血

祭りとして告発されているX伯爵家の罪状はテクストの中で厳然としていて揺るぎがない。佐藤の意図は、〈社会主義なる言葉〉が一人歩きして（一種の地方的恐怖）になることに感嘆し、それに振り回される一女性の滑稽を揶揄しながら、「彼の女」を伯爵一家から救い出し、佐藤春夫の知人である牧師Oに相談させることによって精神的な救済を試みることにあつたといえるだろう。だとしたら、沖野岩三郎のように〈アーチチョークの蕾〉を食さなかつたけれども、その花と蕾に魅惑されていたことに変わりはない。それとも自分は〈病める薔薇〉の人間だと嘯くのだろうか。

までどくらせどこぬひとを

宵待草のやるせなさ

こよいも月のでぬさうな。

〔宵待草〕

「彼の女」は竹久夢二描くところの女性の表情に一脉通じている。「彼の女」はやって来るはずのない〈S・O一族の二青年〉を待つて夕方まで浜辺を彷徨っていたのだろうか。この夢遊病的なシーンは、「孝女白菊の歌」を作った明治の落合直文ではなく、大正ロマンの創出者であつた夢二のほうが相応しいといえる。

それにしても、「彼の女」の切ない妄想とは裏腹に〈S・O一族の二青年〉は何とのんびり帰郷生活を楽しんでることだろうか。西村伊作をはじめ〈S・O一族の二青年〉が新宮と東京を気軽に行き来していたとしても、ここには二つの人間関係を示すものなど何もない。

『或る女の幻想』を旧弊な地方人を啓蒙する役割になわされた小説として読むことは一つの作品理解である。「彼の女」が患っている病理と〈新宮〉という町の共同体からの孤立は、二人の〈亜米利加から帰朝した社会黨員〉のあり方を否定するものである。そして「彼の女」が〈亜米利加から帰朝した社会黨員〉と〈S・O一族の二青年〉を同一視することは、東京と〈新宮〉とで二重に疎外された被害者であることの無意識の振る舞いである。「彼の女」の病理と孤立を救うのはキリスト教だろうか。そうかもしれないし、そうでないかもしれない。そこには〈S・O一族〉を取り巻くキリスト教的雰囲気と佐藤春夫との距離の問題が介在しているといえる。

一九、棲息する〈作者〉／〈転向〉の内実

しかしそうした読解の着地点は『或る女の幻想』における佐藤の執筆意図を充分理解したことはないだろう。「大逆事件」を発見し掘り起こすという意味で『或る女の幻想』は世俗的であるがゆえに失敗しており、『煉瓦の雨』のほうが格段の成功を収めている。「煉瓦の雨」には、悲劇の〈起源〉を追求するため作者自らに課せられた責務からくる他者との応答があるからだ。そしてその〈起源〉はしばしば『聖書』を連想させる。

テクストが〈大逆事件〉〈社会主義〉から〈新宮〉〈地方的恐怖〉へと及び、さらに〈幻想〉〈分身〉と結びつく関連図式によって貫かれているかぎり、発想を大胆に転換する必要がある。それにはこのテクストを作者の文壇的成功と裏腹な〈転向〉小説とす

る見方を導入することである。

「彼の女」を佐藤春夫の立場と仮定してみたらどうだろうか。

佐藤が「彼の女」で、伯爵家の少年紳士を（転向）後の文学世界
＝東京の文壇の寓意と読めば、（佐藤＝「彼の女」を誘拐する二人の社会党員を佐藤の良心的な（分身）つまり（S・Oと呼ばれた人）＝大石誠之助への精神的な紐帯とみなすことが可能となるではないか。

『西班牙犬の家』の成功と『病める薔薇』の世界にある手応えを感じていた——文壇人として生きることが自分の道であると自覚しつつあった——佐藤春夫にとって、新宮における（大逆事件）（社会主義）の中心的な人物である（S・Oと呼ばれた人）＝大石誠之助を召喚し、（新宮）（地方的恐怖）を小説の背景に据えたことは、そこからの解放をもたらすことになったといえるのではないか。それを（傾向詩）に秘められた初期の社会正義からの撤退あるいは社会主義的傾向からの単純な（転向）とみなしては、問題を矮小化してしまふことになる。なぜならば（S・Oと呼ばれた人）＝大石誠之助と（大逆事件）ならびに（社会主義）の問題は、隠蔽されたまま永く彼の文学的地下水となるからである。それはときに倨傲ともいえる相貌をみせることもあった。（新宮）という土地への愛惜の念と（S・Oと呼ばれた人）＝大石誠之助と同じ医者として面識のあった父親—自分という関係、そして（S・O一族）と生田長江、与謝野寛・晶子、石井柏亭らとの媒介者であることの自負「大逆事件」から五年後の一九一五（大正四）年春、与謝野晶子の新宮訪問の案内役をつとめたことなど、同時代を生きた者としての佐藤春夫の心の屈折は他者から読み取

りにくいからである。中村光夫の評論が断定的であるにもかかわらず隔靴搔痒の感が否めないのもそうした事情による。

にもかかわらず、『或る女の幻想』は、佐藤の「大逆事件」からの（転向）が（刻印）された小説の陰画として読むことが可能であろう。佐藤にとって、一九一七（大正六）年から翌年にかけての時代は、文学者としての文壇登録を確実なものとし、それを保証する堅牢な自我の確立を目指すこと、つまり『田園の憂鬱』を緩やかに成熟させた時間だけではなく、精神的な意味において重要な転機の時期と重なっていた。それは（文学と戯れる態度）（中村真一郎）からの離脱のころを意味しただけでない。

一例を挙げれば、やや後のことに属するが、芥川龍之介は、題材の新鮮さ、趣向の面白さ、構想力の豊かさなど小説の技巧面を一切無視して、ただ一言（佐藤春夫の作品にヒユウマンインテレストなきを不足とする）と私信の中で痛烈に批判した（大正八年九月一日付、南部修太郎宛書簡）。文面によると、南部は佐藤の『指紋』（大正七年七月『中央公論』）を芥川の『妖婆』前半（大正八年九月『中央公論』）の上位に置く評価を下した。芥川は、『新潮』の文芸時評でライヴアル意識していた佐藤から『妖婆』を失敗作という烙印を押された上に、取り巻きの南部からも否定的な評価をされたことにショックを受けたわけだ。⁴⁶すでに言及したように（ヒユウマンインテレスト）は大正作家たちにとって文学評価のキーワードであった。そのあるなしは致命的な意味合いをもっていた。一九二一年、谷崎千代夫人との恋愛問題で谷崎との関係が泥沼状態に入り、絶交の危機が迫る段階で、佐藤は谷崎の（人道主義）の欠如を難詰した。⁴⁷

芥川の南部宛書簡に示された〈ヒュウマンインテレスト〉という言葉は、佐藤や南部らの批判を視野に入れた反批判だったと推定される。しかし佐藤にとつては別の意味をもつてわが身に迫りつつある課題であった。それは〈新宮〉という特別な場所と大石一族を背景に〈社会主義〉を題材にした『或る女の幻想』が、佐藤流の〈ヒュウマンインテレスト〉への挑戦だったにもかかわらず、対象を自在に表現しえない限界性を孕んでいたからであった。〈未定稿〉という判断は、これ以上でも以下でもないという宙吊り状態の表明であり、それはとりもなおさず佐藤春夫の〈転向〉という心の揺らぎを意味した。自作に対するアンビヴァレントな態度は、文壇的な評価とは別に同時代のライヴァルの厳しい視線に対する抵抗として自覚されていたはずである。〈転向〉という言葉の方が相応しくないなら、刻印されたタブーを意識しつつ時代にくしくして〈生命〉のかたちをずらして生きるといつてもよい。

『私までが狂いさうだ』は、ある意味で、閉塞感の漂う時代、息苦しさに抗して〈生命〉のかたちをずらして生きることができずに〈狂〉の世界へ追いやられていった人間群像をスケッチしたヒューマンドキュメントとみることができる。一九一〇年代における佐藤春夫の創作活動は、こうした社会現象への関心を抜きにして考えることはできないように思われる。

それから台湾旅行をはさんで六年後——すでに一九二〇年代に入っているが——再び間歇泉のように「大逆事件」の記憶が佐藤流の〈ヒュウマンインテレスト〉として蘇ってくる。

私はこの同じ旅行中にも或る文明国の殖民地を見たが、そこ

ではその文明国人が殖民地土着の民で——けれども相当の文明を持つてゐる人間を、その風俗習慣を異にしてゐるといふことの爲めに、殺しはしなかつたけれども牛馬のやうに遇してゐるのを見た。これなども文明人が他の表情を異にしてゐる文明人を圧倒しようとする有りふれた一例である。また私は或る文明国の政府が、当時の一般国民の常識とややその趣を異にした思想——それによつて一般人類がもつと幸福に成り得るといふ或る思想を抱いてゐた人々を引捉へて、それを危険なる思想と認めて、屢々その種の思想家を牢屋に入れ、時にはほとんど死刑にしたのを見聞いたこともある。文明人たちも亦、野蛮人たちと同じく、自分たちの理解しないものを悉く悪と決定し去つて、その不可解な表情——霊の表情を持つてゐる人を根絶することに努力する。〔魔鳥〕、一九二三・一〇『中央公論』、傍点引用者）

台湾の先住少数民族に対して行なわれた〈文明人〉による理蕃政策は、彼らの平穏な生活を脅かし〈狂〉の世界へと追いやるものであった。その究極の現われが一九三〇年一月に起きた〈霧社事件〉である。佐藤の『霧社』はその五年前に発表されていた（一九二五・三『改造』）。文明批評家としての貌をもつ詩人の鋭い感受性が捉えた予言的な小説といえた。

〈魔鳥〉を信じる〈殖民地土着の民〉と同類と目された〈或る文明国の政府〉についての考察は明らかに「大逆事件」を指している。

一九二三（大正一二）年九月一日に起きた関東大震災の混乱と

政局の混乱のさなかの一日、大杉栄と伊藤野枝が甥の橋宗一少年とともに甘粕正彦憲兵大尉らの手にかかって殺害されるという事件が起きる。公表はしばらく伏せられていたために佐藤が知ったのは新聞に報道され始めた九月二〇日前後のことだろう。佐藤にとって大石七分とも共通の友人だった親しい人間に加えられた無慈悲な惨殺行為は、輜晦やレトリックという表現領域を超えて身に迫ってきた。「大逆事件」というインデックスでは把握できない現実には直面したわけだ。佐藤は大石誠之助について個性的な旧知の人物を失ったことになる。

甘粕事件は「大逆事件」を生き延びた大杉——彼は、春三月縊り残され花に舞ふ」と詠んでいた——という一個人に加えられた襲撃だった。大杉は一年ほど前、高橋是清内閣によって提出された「過激社会運動取締法案」の危険性を見抜いて反対を唱え、政府の道具と化そうとしている（進歩思想家）を当面の敵として痛烈に批判した（「先づ彼等を叩き倒せ」）。

社会は大杉に蓄えられた知識と語学力を有効に活かそうとはしなかった。大杉が身につけたアナキズムという固有な妥当性の体系と自由奔放な男女関係は敵視され、権力者はその言動をたえずマークし危険人物として蛇蝎のごとく嫌った。陸軍少尉だった父親や伯父・従兄など親族縁者に高級軍人がいたけれども、それは助けとはならなかった。

佐藤は大杉の人間的な魅力と交友関係を「吾が回想する大杉栄」と題して『中央公論』（一九二三・一一）に発表して追悼した。『定本佐藤春夫全集』第三六巻には、この事件前後——だけでなく一九二三（大正一二）年——に発信された書簡は異例なこ

とに一通も収録されていない。

しばらくの間、佐藤は台湾旅行の遺産を新たなかたちで文学的な課題として取り組む。『霧社』や『殖民地の旅』や『女誠扇綺談』などの作品がそれであった。『霧社』については「[IHA FORMOSA]の誘惑——佐藤春夫と植民地台湾（II）——」（『立教大学日本文学』第九〇号、二〇〇三・七）で論じた。⁵⁰

（了）

注

(39) 『民衆の芸術』については、紅野敏郎『民衆の芸術』について（『増補新編 文学史の園 一九一〇年代』一九八四・九、青英舎）が参考になる。同書四六五頁〜四六八頁。

(40) 宮本忠雄『精神分裂症の世界』（一九六六・一二、紀伊国屋書店）七五頁。一八九三年、クレペリンによって定立された精神医学の疾病学であるパラノイア（妄想症）に言及した箇所。

(41) 小田切秀雄「近代社会主義文学集解説」（『日本近代文学大系51』一九七一・九、角川書店）、二三頁、二七頁。なお、『宿命』の単行本は、一九一九（大正八）年二月三〇日、福永書店から刊行された。富本憲吉装画・伊上凡骨彫刻。扉には「本書の原稿、二十字詰十行一千百八十枚の内七百七十枚までは全然大阪朝日新聞の懸賞当選小説として発表しなかつた部分であります。残余の四百十枚も余程内容に改竄を加えてあります」という断り書きが掲げられている。そうすると、『大阪朝日新聞』の掲載分は四百字詰めに換算して二〇五

枚。それに対しても加筆訂正がなされているという。

- (42) 中村光夫は、傲慢ともいえる自信に満ちた〈個性〉が〈個性の本当の成長を妨げてゐる〉と指摘し、〈詩から散文へ、文学青年から大人の芸術家への転化は、氏にあつては自然の成熟といふより、断絶あるひは推移の過程をとりまます。大石誠之助も、「永遠の世界」に生きるA・Fもともに氏の青春期の幻影であり、現在の氏はそれから離れた場所にある風に、彼等は描かれてゐます。〉(『佐藤春夫論』(一九六二・一、文藝春秋新社)一六七頁)と批判する。しかし拙論は縷々論じてきたように、そうした見方をとらない。

- (43) 黒川創『きれいな風貌 西村伊作伝』(二〇一一・二、新潮社)五七〜六〇頁。

- (44) 近藤富枝『本郷菊富士ホテル』(一九八三・四、中央公論社)五七〜五八頁。「大杉栄と大石七分」の項。また武田信明『〈個室〉と〈まなざし〉 菊富士ホテルから見る「大正」空間』(一九九五・一〇、講談社)二九頁、一七四頁。なお、大石七分の評伝ならびに佐藤春夫との関係については、山中千春の「大石七分と佐藤春夫(一)(二)」が新見を示し参考になる(『トスキナア』第七号(二〇〇八・四)・第九号(二〇〇九・四))。

- (45) 中村真一郎は『F・O・U』について「一九二〇年代のパリの新芸術運動の雰囲気背景にして、狂気の一日本人画家の短かい生涯を描いている。それは多分、全くの架空の物語なのだろうが、実によく当時の芸術運動の余響を伝えている。」(『日本文学全集25 佐藤春夫集』解説(一九六一・一

- 一、新潮社)と評価している。この見解は小林秀雄の「佐藤春夫のヂレンマ」とは対極にある。中村の批評は、大石七分がモデルであるという観点を導入しない一つの見識ある鑑賞態度といえよう。なお、林浩平の「佐藤春夫解説——文学のなかのスキゾフレニーとパラノイア」(東横学園女子短期大学『東横国文学』(一九九六・三)、のち「テクストの思考——日本近現代文学を読む」(二〇一一・二、春風社)所収)は優れた『F・O・U』論かつ周到な佐藤春夫論である。また加藤百合は主人公石野牧雄に大石七分の体験が反映していると見ている(『大正の夢の設計家 西村伊作と文化学院』一九九〇・一、朝日新聞社)。同書一五二頁。

- (46) 佐藤は『創作月旦』(三)「苦の世界」と「妖婆」(一九一九・一〇『新潮』)で芥川龍之介の『妖婆』前半を読んで、「これが力作であるとしても、又、これが未完の作品であつても、私はこれを全く失敗の作であると私が考えることに躊躇しないものである。」と手厳しい批判を加えた。

- (47) 一九二一年一月二八日付、谷崎千代宛書簡。『定本佐藤春夫全集』第三六卷(二〇〇一・六、臨川書店)四九頁下段。

- (48) 『定本佐藤春夫全集』第五卷(一九九八・五、臨川書店)三七六頁下段。なお『魔鳥』については、一九九六年一月、黒川創が自ら編集した『〈外地〉の日本語文学選1 南方・南洋／台湾』(新宿書房)に収録された。作品内容は、台湾に旅行中、佐藤が森丑之助(丙牛)の仲介により、当時の民政長官下村宏(海南)の世話で先住山岳民族のタイヤル族の居住する霧社に入った体験に基づいている。その解説で(こ

こでの「或る文明国の政府」が「一般人類がもつと幸福に成り得るといふ或る思想を抱いていた人々」を「牢屋に入れ」「時にはほとんど死刑にした」という事態は、あの震災時における社会主義者らの大量拘引と大杉栄らの殺害をさしており（同書二九六頁）と書いている。しかし佐藤の文脈からは、明らかに「大逆事件」を意識していることが読み取れる。

(49) 加藤友次郎首相は、一九二三年七月下旬に病氣となり、八月二四日、在任中に死去した。死去後ただちに外務大臣内田康哉が首相を兼任し任務を遂行したが、関東大震災後の九月二日には第二次山本権兵衛内閣が成立した。

(50) この論文は、「〈ILHA FORMOSA〉の誘惑——佐藤春夫と植民地台湾（I）——」（『立教大学日本文学』第八九号、二〇〇二・一一）とともに、阮文雅・張政傑両氏によって訳され、呉佩珍主編『中心到邊陲的重軌與分軌 日本帝國與臺灣文學・文化研究 上』（二〇一二年・八、國立臺灣大學）に収録された。同書百九九頁～二五七頁。

（いしざわひとし・元本学教授）